

日銀の視点

往時をしるばる。手のひらほどのパスポートには、そんな記憶を紡ぐ不思議な力が秘められています。無造作に押されたスタンプ、査証の記録を見ていると、その土地の景色だけでなく、当時の心の内や空気感までも鮮やかによみがえります。初の海外で、異持ちが高揚したバンコク、異性を追いかけて後先考えずに向かったモスクワ、新婚旅行で妻と過ごしたハワイ、長男と2人で旅をした桂林、そして現代史を体感するために

日銀水戸事務所長

安田 武

次男と訪れたホーチミン。皆さんにも、きっとそれぞれの物語があることでしょう。

日本のパスポートの原形は、欧米を参考に19世紀後半に作られたと通説のようです。しかし、日本でも

もはやパスポートといっても過言ではないのかもしれない。

江戸中期の元禄時代に入ると、街道と宿場町が整備され、庶民の間でも旅行を楽しむ文化が芽生えました。特に人気

いてパスポートの存在は、昔から馴染み深いものであったことがわかります。

さて、当地でも、県が県内へは茨城愛の向上、県外へは茨城ファンの増加を狙って、「IBARAKI PASSPORT」(い

パスポートが紡ぐもの

既に江戸時代には旅人などが国元を離れる際、身分証明と合わせて旅先で事故にあった時のサポートを要請するため、のしを携帯していたとの史実もあります。パスポートの機能を身分証明と保護救済に求めるとすれば、この手形は

があったのが「お伊勢参り」。東方の旅人であれば、その「パスポート」を携えて、丸子のところ、新居のうなぎ、桑名のはまぐり、といった東海道の名産品を打ちながら、伊勢までの旅路を楽しんでいたのでしょうか。旅にお

の「群馬県」を発行しました。「群馬県」の「群馬県」の知事の宣伝が、かえって評判を呼んで人気を集めているようです。

の大きな財産です。私も、パスポートを手がかりに県内44市町村を巡って茨城愛を育むとともに、県外の人たちにその魅力を伝えていきます。

県観光誘客課によれば、県内企業からも「IBARAKI PASSPORT」を活用したサービスやキャンペーンなどの提案が寄せられているそうです。さらなる活用は検討中とのことですが、このパスポートを起点に、官民が一体となって県内経済を盛り上げる機運となる可能性を感じます。パスポートが紡ぐ茨城。点が線、線が面となって広がっていくことを期待しましょう。